

めにも、3 か国によるインターネットベースの英文論文集の創刊を提案。韓国の教授たちから大きな反響があり、山口委員を窓口に構想を詰めることとした。

ブサンは古来よりわが国との関係も深い地域である。刺身などの食事もわが国と共通性の多い環境であると言えるだろう。おりしも日本企業の設計、施工管理による、首都高速のレインボーブリッジに似たセンタースパン 500 m のつり橋 Gwangan Bridge が完成間近で、完成すれば現在世界第 3 位のコンテナ貨物取り扱い量を誇るブサン港の港湾地域の物流改善に貢献するという。市内はアジア大会終了直後でインフラ整備が目立ったが、郊外に出ると日本の郊外に似た田園の雰囲気も楽しめる。



写真 KSCE国際ナショナルラウンドテーブル出席者、前列右より三木千壽 国際委員長、謝季壽台湾分会長、河珍圭KSCE会長、金光鑑ACECC会長

中国土木工程学会90周年記念行事参加報告

フェロー会員 古木守靖（土木学会専務理事）

11月26日から三日間の日程で北京において協定学会である中国土木工程学会（CCES）の年次総会と90周年記念式典があり、大林芳久国際委員会副委員長らとともに出席した。

中国土木工程学会は日本の土木学界に建築の構造分野を加え、河川水利、鉄道分野を除いた分野から成り立ち、学、官、産の技術者が集合する団体で、日本に比べ官の役割が大きいことを除けば日本と比較的類似の学会といえる。北京政府の建設部に間借りする本部と全国19の支部から成り立ち現在会員は9万人である。会長に相当する理事長はもと建設部副部長（建設事務次官）譚慶璉（Tang Qinglian）氏で常務理事は約50人、事務局員10数名ほどで、活動の多くは官吏や大学人の参加によっているとのこと。常時事務局に勤務するトップは秘書長であり、今回改選され建築畑の張朝貴さんから土質分野の張雁さんに引き継がれた。

90周年は総会の会場となった友誼会館（フレンドシップホテル）の大講堂において約800名の出席のもと開催された。譚会長による90年間の総括と今後の展開を述べた挨拶の後、中国科学技術協会主席、建設部長（大臣）、日本の土木学会等来賓の挨拶があり、さらに過去3か年の優秀事業、優秀論文、優秀学生（今年土木に入った学生）等の表彰式が行われた。なお中国土木工程学会90年とはわが国の日本工学会に相当する中華工程師会の約50年時代を含めたものとなっている。

夕食時の秘書長らとの歓談において、中国土木工程学会では会員に対するサービス向上が大きな課題となっていること、また外国との協定については具体的な事業の実施を期待しているとのことであった。わが方からは、第三回CECARへの案内と、もし国際パネル等の企画での協力を期待している旨の発言をした。従来国際的活動には必ずしも力を入れては来ていないが、今年は譚会長がASCE150周年事業に参加し、また事務局には日本語のできるスタッフ（周貴栄さん）も配置されるなど国際的活動に対応する姿勢がうかがえる。

帰国の日の朝、中国土木工程学会のお世話で華北高速道路会社を訪問し、会社の社長に相当するDong Pingru（董）総経理に対応していただいた。ここは北京・天津・塘沽（タンクー）間142kmの京津塘高速道路（元北京天津高速道路）の維持管理を行う株式会社で、上場されている。道路資産は別途3社の資産管理会社と持ち株会社によって管理されており、華北高速



写真-1 中国土木工程学会90周年式典風景



写真-2 北京市内の歩道・自転車道が桁の中にくみこまれた立体交差

道路会社はこの道路を借り受け運営して、世銀、アジ銀からの借入れ金を30年で政府に返済してゆくこととしているという。収支はきわめて良好に思えたので、「もし早く返済できたならこの会社は解散するのか」とたずねたところ、剰余金を他地域の高速道路事業などの投資に振り向けるようなことを考えているとのこと。なお現在本社には20人ほどのスタッフが居るだけであとは下請け会社へ外注とのこと。また「配当は？」と株を持っているという担当に聞くと若干の間があって1%以下の配当であると渋い顔をしていた。

2日間の滞在で十分な観察ではなかったが若干の感想を加えておく。約25年ぶりの北京であったが、うわさどおりまったくの近代都市に変身していて、特に道路、地下鉄等のインフラ整備も目覚ましい。幅80~100mの都市環状道路は4本がほぼ完成し、5本目を計画中。八達嶺高速道路、京津塘高速道路、首都機場高速道路はそれら環状道路と立派なジャンクションで接続されて見事である。また高速道路の構造物、法面処理、デザイン、街路における美しい横断歩道橋、立体交差において歩道自

転車道を取り込んだ、恐らく世界の先端的設計を参考にしたと思われるきめ細かな設計などわが国もお手本にすべき施設がそこそこに見出せた。またちょうどテレビニュースの報道で、長江の水を黄河の導くという「南水北調」と呼ばれるプロジェクトを紹介していたが、2050年を目標にしているとのことで、極端に短期的視野からの公共事業批判が卓越するわが国に比較し、50年の長期に渡る事業が政府で議論できるというこの国の大きさを感じた。

中国土木水利工程学会(CICHE)年次総会に参加して

正会員 天野正徳(東京電力建設部)

11月28日・29日両日、台北市内において「中国土木水利工程学会(CICHE)年次総会」が開催された。JSCEからは、岸会長、国際委員会の須田委員および天野が参加した。

行程は以下のとおりである。

11月28日(木) スタディーツアー(新幹線工事現場視察)

歓迎レセプション

11月29日(金) 年次総会開会式

スタディーツアー(道路高架橋現場視察、台北市内視察)

International Roundtable

なおこの日程に先立ち、岸会長と天野は、日本と台湾との友好の架け橋となったプロジェクトとして有名な「烏山頭ダム」、および日本のゼネコンが台湾で実施中の、「高雄市地下鉄工事」「龍門原子力発電所工事」「新幹線トンネル工事」もあわせて視察した。

CICHE年次総会の開会式は、台北技術大学の講堂で、政府高官、海外の協定学会からの来賓など数百人を迎え華やかに執り行われた(すべて中国語なので内容は不明)。

スタディーツアーは、海外からの来賓のみを対象にして企画されていたが、当該国への留学経験者などをガイドとして添乗させるなど、細かいところまで配慮が行き届いていた。

ここではInternational Roundtableの内容について触れたい。

今回のInternational Roundtableには、ホストのCICHE以外に、ASEC、およびASCE(アメリカ)、KSCE(韓国)、IEM(マレーシア)、JSCE(日本)から、各学会長を含め合計約20名が参加した。

この場で、韓国の土木学会の代表から以下の提案がなされた。

- ・ここに集まっているような協定学会のメンバーはそれぞれの総会を相互訪問するため、毎年数回は必ず顔を合わせている。
- ・このような貴重な場を、ぜひ実りのあるものにしたい。
- ・来年から、各ホスト協会がテーマを決めて、全員で建設的な議論を行うようにしていきたい。
- ・例えば、日本は災害防止・復旧などに関するテーマで他のメンバーに貴重な示唆を与えるような場を作ってもらえないか。

この提案に対して反対意見は出ず、来年以降、各国の総会において協定学会が集まり建設的な議論を行っていくことになった。

今回は事前に特段のテーマが定められてはいなかったが、「若者の土木離れ防止」に関して1時間以上にわたって活発な議論がなされた。

今回のCICHEの公式行事として、台湾にいるASCE会員が集まり、ASCEから今回の総会に出席した会長を含め3名のゲ



写真 烏山頭ダム湖畔にある八田與一像の脇に立つ岸会長

ストを囲んだ会食が企画されていた。海外に居住するメンバーを強くグリップし、ASCEに所属することのメリットを会員に再認識させる戦略であると考えられるが、大変興味を引かれた。

ASCEをはじめ、台湾、韓国など各国の土木学会は、海外の協定学会との相互交流に非常に熱心であるという印象を受けた。JSCEにおいても、今後国際委員会を中心に、International Activityに関するStrategyのより一層の強化、International Roundtable出席者の継続性に関して検討を行っていくことが必要と感じさせられた。

最後に、総会に先立ち視察を行った「烏山頭ダム」に関して簡単に触れさせていただく。

「烏山頭ダム」は戦前台湾に赴任した日本人技師の八田與一氏が中心となって建設したダムで、このダムにより台南地方の農業生産が飛躍的に向上した。八田技師は地元の住民からも大変慕われ、その銅像は戦時中にも接収されないよう住民の手で隠され、現在は再度ダム湖の湖岸に据えられ、訪れる人たちを見つめている。

「烏山頭ダム」および八田與一の詳細に関しては、すでに古木専務理事が学会誌2002年5月号に記載しているのでここでは省略する。

一般、実現はしなかったものの、慶応大学の三田祭において李登輝前総統の講演会が計画されていたことはすでに皆様ご承知のとおりである。実はこの時の李前総統が予定していた講演内容は、八田與一技師の話であった。異国の地で地元住民のために生涯をかけた八田技師の事例をあげ、八田氏に見られるような「公に奉ずる日本精神」こそが、これからの国際化社会を生きる日本人に欠かせないアイデンティティーであり日本の資質と実力だと、説いていた。

ぜひ皆様も一度機会を見つけて、「烏山頭ダム」を訪れ、大先輩の残した業績を確認していただきたい。